

内陸舟運の動向に関する研究

日本大学理工学部 学生会員 ○吉田 庸
 四万十川自然科学研究所有限会社 非会員 西内 燦夫
 復建調査設計株式会社 正会員 福成 孝三
 日本大学理工学部 正会員 吉川 勝秀

1. はじめに

舟運はかつて物資や人を運ぶ重要な交通手段であったが、明治以降の陸上交通の発達によって衰退した。しかし阪神大震災以降舟運は災害時における輸送手段として活用、さらに近年では都市の再生や地域振興などにおいて、再び注目されている。本研究では事業者に対して利用者数に関するヒアリング調査を行い、得られた結果から河川舟運の動向を調査し、実態を明らかにする。

2. 内陸舟運の動向

2-1 日本の舟運

日本における舟運の歴史は古く、かつては内陸舟運が交通輸送の中心となっていた。鉄道の発達が初期の段階では、互いに補完・協業してその役割を果たしていたが、その後の鉄道の急激な発達は、両者の競合を生み、併存しながらも鉄道優位となった。さらに道路整備の時代になると急速にその姿を消していった。近年になり新たな舟運が再興あるいは創造され、都市・地域と河川・運河等の水空間とを結びつけるとともに観光等の地域振興にも寄与する事例が数多く出てきている。

2-2 世界の舟運

日本のみならず世界的にも道路交通が交通の中心となっているが、都市の重要な装置として舟運を生かしている都市も多くある。

都市の中の河川として有名なパリのセーヌ川では年間に 700 万人、ロンドンのテムズ川では約 250 万人が観光船に乗っている。タイのバンコクでは都心を貫流するチャオプラヤ川は観光の他にも通学や通勤で年間に約 8000 万人が乗船している¹⁾。これらの乗客数から分かるように舟運は観光資源として有効であり、観光立国を目指す日本にとって舟運は、重要である。

3. 舟運の現状

図-1 にメールや電話で舟運の動向についてヒアリ

ング調査した結果を基に評価を行なった。表-1 に調査した事業者を示した。

3-1 全国の舟運の動向

(1)都市部

都市部で舟運を運行している事業者は、東京都観光汽船のように古くから営業している会社もあるが、多くの事業者は、2000 年代から舟運を運行している事業者が多いことから都市部での舟運は振興してきているといえる。

(2) 地方部

地方部において舟運は、都市部のように 2000 年代から舟運が振興しておらず、1980 年代以前の事業者が多い。地方部で最も利用者数が多い最上峡谷芭蕉ラインでは、最盛期よりは利用客数は減少しているものの、開業初期と比べると未だに多くの利用者がいることが分かる。

(3)都市部と地方部の比較

(1),(2)より都市部では舟運が振興してきているが、地方部では振興していないということが分かる。乗客数については東京都観光汽船が多くの乗客を集めている。

表-1 全国の観光舟運、事業者等

都市部	新潟県・信濃川ウオーターシャトル株式会社(信濃川)
	東京都・東京都観光水上バス(隅田川)
	大阪府・大阪水上バス(旧淀川・道頓堀川)など
地方部	長野県・天竜ライン遊舟
	埼玉県・荒川ライン下り(荒川)
	神奈川県・箱根芦ノ湖遊覧船(芦ノ湖)など
社会実験等	東京都・日本橋川再生 電動船
	徳島県・徳島遊覧船(NPO法人新町川を守る会)など

3-2 振興する舟運-松江堀川

松江堀川は約 400 年前に造られた人工の水路で、江戸時代には水上交通として利用されていたが、時代が経つにつれて環境が悪化した。1966～1967 年頃に市民に「堀川を再生させる」という意識が住民の中で高まり、堀川を再生していく中で、昭和 55 年に松江青年会義所が「よみがえる堀川の会」を発足させ、その中で堀川に遊覧船

キーワード 舟運の動向 観光資源 振興

〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1-737 日本大学理工学部水環境システム研究室 TEL 047-469-5228

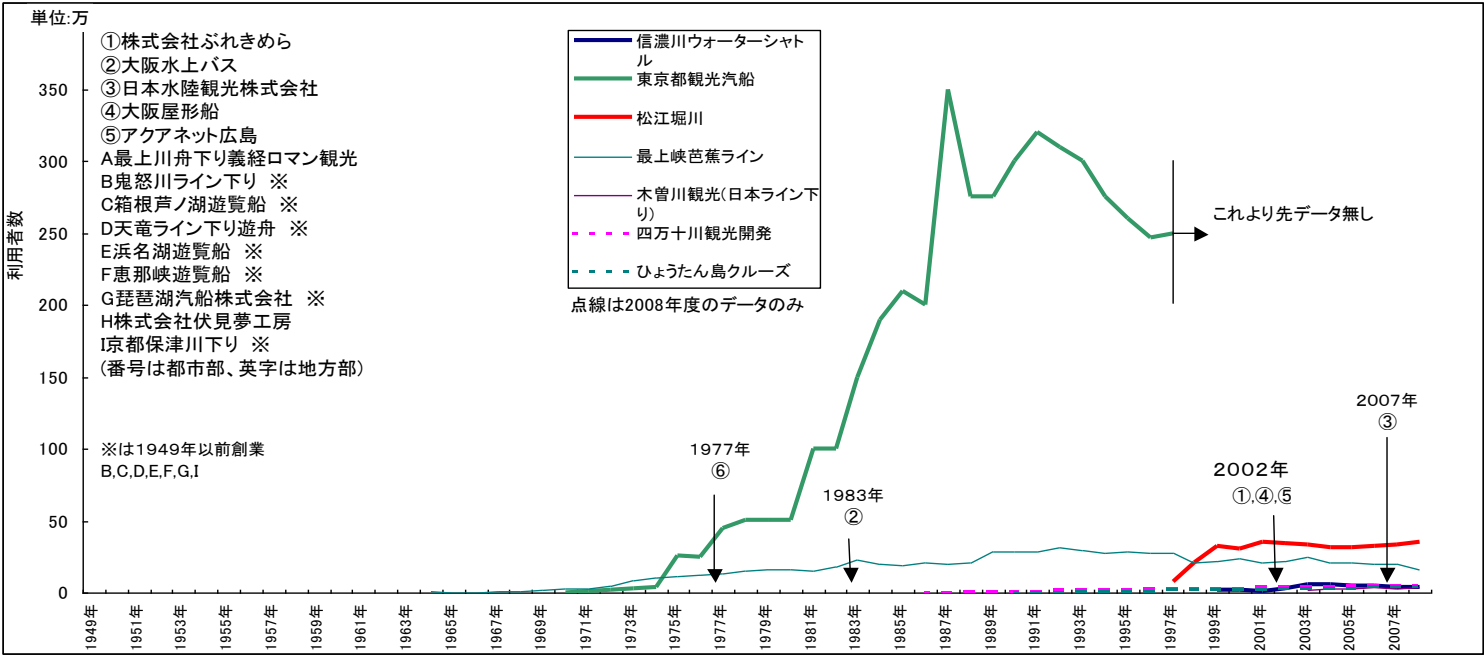


図-1 全国の観光舟運の動向

を運航させることが検討された。その後 1997 年より堀川遊覧船が創業した。堀川遊覧船が創業してまもなく利用者は 30 万人を超え、現在では 34 万人前後の利用がある。この遊覧船では船頭や運営など高齢者登用を行っており、高齢者を雇用することによって社会的な役割も担うようになっている。

3-3 振興する舟運-四万十川

四万十川は、1983 年に NHK による全国放送がきっかけになり観光客が急増し、1996 年には 100 万人を突破したが、近年では 75～80 万人程度である。1996 年までの急成長は今では「四万十川ブーム」と呼ばれた。この時期の観光客と屋形船利用客数は比例するように増加しており、屋形船を運行する事業者が増えてきた。表-2 に示したように 2008 年の利用者で年間約 15 万人が利用するまでになっている。用井観光遊覧船と四万十川観光開発以外の事業者は個人経営である。

四万十川舟運は、観光の重要なメニューの一つとなっている。

表-2 四万十川の屋形船と利用者数

会社	所在地	運行区	創業	2008年度利用者数
用井観光遊覧船組合	四万十川市	上流	1993	1158
寿や	四万十川市	上流	1998	120
大川遊覧船	四万十川市	中流	1985(2005)	2000
四万十の碧	四万十川市	中流	1994	27000
なつとく	四万十川市	中流	1992	28000
彦	四万十川市	中流	2007	1200
神川	四万十川市	中流	1985	30000
松廣屋	四万十川市	中流	1991	3000
船辰	四万十川市	下流	1985	0
四万十川観光開発	四万十川市	下流	1973	50000
同社舟母部門	四万十川市	下流	2000	7000
合計				149478

上流は30km以上、中流は15～30km、下流は15km以内とする

4. 結語

舟運は、近年の動向として、特に都市部で新たなサービスとして振興してきているといえる。その例として松江堀川などがあり、地方部では四万十川の例が挙げられる。観光立国を目指す日本は舟運の充実化が重要となってくると推測される。

参考文献

- 1) 吉川勝秀:河川の管理と空間利用,2009 年,鹿島出版会
- 2) 河川舟運制度研究会:河川舟運ハンドブック,2001 年 大成出版社
- 3) 財団法人リバーフロント整備センター:内陸舟運への招待,2003 年,株式会社サンワ
- 4) 三浦裕二, 陣内秀信, 吉川勝秀編著:舟運都市,2008 年, 鹿島出版会